

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010-2012

課題番号：22520100

研究課題名（和文）東アジアの生態・環境美学的自然美の研究—日本を焦点として—

研究課題名（英文）On Environmental and Ecological Aesthetics of East Asia's Natural Beauty, with Particular Emphasis on Japan

研究代表者

青木 孝夫（AOKI TAKAO）

広島大学・大学院総合科学研究科・教授

研究者番号：40192455

研究成果の概要（和文）：

日本を焦点とする東アジアを軸に、広義の雨（雨・霞・雪・霧等々）と陰的気候（冷気・夜分・湿気）を扱う藝術や思想を対象に、気象の美学を研究した。視覚中心主義ではない環境体験が美的伝統となっている東アジアでは、自然を花月のごとき景物中心に享受するだけでなく、夜雨や夜梅のごとく気分的に感受することを、事例の検証を通し解明した。藝術作品から輪郭の定かでない気象・天候へと研究領域を拡大することは、必然的に理論枠の変革を促す。その意味で、本研究は、芸術中心に展開してきた西欧近代美学の改革を担う環境美学や雰囲気の美学の推進であると共に、その基礎理論革新への努力でもある。この間、西欧近代美学の限界の指摘と東西の美学の対話の促進を説いてきた。

研究成果の概要（英文）：

Research in the arts and culture of East Asia has shown that rain and other “negative” weather conditions play an important role in aesthetic experience of the environment. These conditions include night darkness, the obscurity brought on by fog or mist, and a sense of being hemmed in by inclement weather. Aesthetic experiences of rain (or of snow, haze, fog, cloud and so on) and of unpleasant weather (coldness, humidity, darkness) have enlarged the field of traditional aesthetics, approached mainly through the arts. They also offer an alternative to the Western aesthetic paradigm, which normally focusses on visual aspects of the environment and solid forms or phases of nature. Comparative cultural as well as theoretical researches have contributed to a realization of the limits of old aesthetic approaches and of the importance of cultural dialogue between East and West in the field of aesthetics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：雨の美学 朦朧 雰囲気 気象の美学 比較美学 環境美学 身心美学 浸透

1. 研究開始当初の背景

(1)半世紀前の環境意識の高まりから生まれた保護運動や環境倫理や環境美学は、例えば美学の領域では、サウンド・スケープの概念を生み、「音の風景」などは、日本に定着を見ている。これは、近代と共に展開した西欧美学の変革への動きであったが、それは、今日、一層顕著になっている。

(2)高級文化としての藝術を焦点とした哲学・歴史学・文化学としての従来の美学が、自然や大衆文化や日常文化に領域を拡大して変貌しつつある。この状況で、すでに自然美を含む環境の美学や日常性の美学が展開していた。その動向そのものが西欧を軸とする歴史的・理論的枠組みの中から生まれているが、これはまた現代の文明・知性の動向として、他地域・他文明圏へと波及している。

(3)西欧発の環境や生態に関する美学の研究は進んでいたが、一方、東アジアの伝統や風土の中から、旧美学のパラダイムの解体を進め、これを革新しつつ建設するための歴史的風土的研究も始まっていた。しかし、中国、日本をはじめ自然美についての分厚い伝統のある東アジア文化圏の中から、清新な美学研究は、まだ十分に展開しているとは言えない。

(4)日常の美学と自然の美学は、東アジアでは一体的に展開してきた。それを典型的に示す現象として、天候・気象の美学を取り上げて、人文学的な検証の上で、新しい美学の動向を展開することが可能な状況にさし掛かっていた。それは、中国の曾繁仁の生態美学や北米の齋藤百合子や日本の佐々木健一の研究の展開にも示され、いわば機が熟していた。

2. 研究の目的

(1)雨・雲・雪・霞・霧等を含む広義の雨、さらには夜・冷気・湿気等の気候、これらの通常は消極的と解される気象・気候・天候現象の有する積極的な美的文化的豊穡さを、藝術作品や藝術現象や日常の美的文化の人文科学的解明を通して例証し、かつその美学的思想的意義を闡明する。

(2)東アジアで育まれた気象の美学の文化的伝統の解明を通して、現在、問題になっている西欧・近代・藝術中心の美学的文化的パースペクティブの革新の動きを更に推進する。

(3)そのことを通し、美学の領域に於ける

学問的な原理を間文化的に問い直すことを進め、種々の文化間、また文明間に於ける対話としての比較美学の必要性を示す。

3. 研究の方法

(1)文化現象の解明：気象を焦点とする自然環境の美学的考察は、個人的趣味の相対性や人間の生理次元の美的反応を中心的に解明するのではない。陰的ないし消極的な自然美や環境の美的側面の把握には深く文化が関与している。それは、文化の形態としては、藝術作品や藝術現象、また日常的な文化や宗教思想等に表明されている。東アジアの文化圏の歴史的風土的伝統に留意して、それら多種多様な文化の内在的な解明を通してこそ、東アジアの、或いは日本の陰的な気象の美学は闡明される。

(2)理論的検討：上記の文化的事象の解明の過程で、西欧の近代や古典的美学の研究と照合して、比較美学的考察を実施する。そのためにも、東アジア圏の美学、ことに日本の美学の検討を歴史的理論的に展開する。

(3)論文としてまとめた考察を内外の学会や学会誌に発表し、知的な交流の中で考察を深め、協力者を求め、また陰的気象美学の文化的また原理的考察を進める。

4. 研究成果

下記5.に掲出する学会発表や発表論文や原稿に言及せずに事象に即して述べる。

(1)研究事象の発見と学問的意義づけ：

雨や夜や寒冷の如き気象・天候・時刻の否定的条件をも風流とする東アジアの自然美学を、朦朧・夜雨・浸透等々を軸に解明し、西欧的な自然美学の標準的パラダイムの変革を推進した。

西欧近代美学の藝術中心主義から自然や日常への美学の研究領域の拡大は、単なる研究領域の拡張ではなく、同時に、研究そのもののパラダイムの変革でもある。

このことにより、多元的な美学研究の重要性が一層かつ具体的に闡明になった。

(2)研究対象の拡大：

具体的には、藝術から自然現象への拡大は、山岳や巨木・巨岩への注目として理解されるだけではない。気象・天候・季節・気候を総括して気象の美学として考える時、そこに顕著に見出されるのは、対象が明瞭な形をもつとは限らず、時間(とくに人間の日常を基盤とした時間)の経過の中で変容し、移ろう現象で

あることである。そこには、美的対象の存在論的基盤を、確固たるものに置きがちな、従来の造形美術中心的な理論構築の根本的な見直しが明らかになった。

(3) 藝術モデル：

自然現象を美的に把握する場合、時に藝術モデルの援用がなされるが、その場合でも、造形美術(つまり絵画や彫刻)は、存分に機能しえない。自然現象の美的経験に、藝術経験のモデルが深く関与しているとしても、それは、従来の藝術現象では尽くされていない風・湿度・気温・匂い等々の次元を有する。

それ故、陰的気象の美的体験に機能する端的な藝術モデルは存在しないが、東アジアでは文学的伝統が、大きな役割を果たしてきた。従って、美術作品だけでなく、詩歌を一つの軸にし、更に所謂文献に現れている思想や感性をも参照し解釈することで、東アジアの感性史の解明を進めた。

その結果、例えば、透明な距離を前提に景物の形や色彩を認知する視覚の美学と、世界と自己の関係を融合・接触・包摂として感知する美的体験は異なり、後者は文学的伝統と深く結びついて培われた浸透モデルで把握されること等を示した。

(4) 美学理論の基盤としての文化：

陰的気象は、東アジアのモンスーン的気候や多雨や四季の明瞭性と切り離して考察できない。理論的考察の枠組みや考察の傾向性に、風土や歴史性は深く関与している。このように美学には、普遍的な側面のみならず、具体的な文化と歴史の中でこそ培われる深い次元が存在していることを示し、またそれゆえに、多元的文化は、比較美学の対話的基盤の根拠でもあることを明らかにした。

(5) 文化の基盤としての日常性：

気象の美学は、藝術の基盤としての日常性から育ち、同時に日常の生の文化を彫琢している。例えば、日本の歴史と風土の中から成立した俳句の歳時記が示すごとく、気象の美学は、日常の文化や藝術文化という広義の制度の中に深く根を下ろし、その文化的命脈を保ちつつ、また我々の感性を形成するものでもある。気象の美学は、四季の如き季節と共に、旬の食や和菓子・酒・武器等の小品にまで展開していることを、具体的に解明して、以上の論点を例証した。

(6) 身心また実存の関与と変容

我々の文化圏では、気象と連動する寒さや冷気や湿度が、微妙な形で美的倫理的範疇を形成してきた。冷水による禊ぎや冷気の中での寒稽古の如き身心的修行またそれによる精神の変容は美的でもあれば、宗教的倫理的で

もある。気象・気温の体感的次元は、同時に実存的な生の基盤でもある。このように気象・気温の側面は実存的状況と連動し独特の美的体験の生起に貢献するが、その際、五感を蔵する身心が大きな役割を果たすことを、暮雨・冷・氷といった日本の美学思想と関連づけて、その身心美学的意義を闡明した。

(7) 自然の気象用語と美的範疇の問題

「しめやか」や「しみる」は、湿度や水に由来する日常用語であるが、芸術の創作や享受、また日常の美学の用語として有用であり、美的範疇として取り上げられるべきである。こうした気象関連の用語は、名詞に限らず他の品詞や単語の次元を越えた文法形態にも見出される。こうした美的範疇以前の潜在的用語は、各文化圏の中に存在し、暗黙の美学の形成拠点となっている。この点から比較美学や普遍美学の基礎が展開できることを、本研究では、随所で示唆してきた。これは成果であるが、同時にまたその集約的考察は今後の課題でもある。

(8) 総括と今後

東アジアの広義の雨の美学は、美的経験の基準を対象の知的認知よりも主客の全身心的融合に置く。美を知性と関連させるよりも自然的靈性との和合と関連させる。東アジアの自然美学は、いわば「形なきものの形を見ようとする点で、身心的実存を軸に靈的また生態的生命の連関へと開かれている。しかし、一方で、気象の美学は日常性の中に深く根ざしており、例えば俳句の歳時記に結晶している。比較文化的に言えば、東アジアに豊穡なこうした気象・気候の美学について、書籍として刊行できるだけの研究や準備はできた。書肆と具体的な交渉に入る予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- (1) 青木 孝夫「雨境之景色観—雨の美学序章—」、『東方美学研究会』、査読無、6 巻、2013 (印刷中)
- (2) 青木 孝夫、「陰的気象の美学と身心的実存の交流」、『アルス・ウナ芸術論集』、査読有、3 巻、2013 (印刷中)
- (3) Takao Aoki, The Aesthetics of Night Rain as a Topos of Self-Recovery, using the Penetrating Model of Natural Beauty, Comparative Aesthetics, 査読有, 2012, 2:185-197
- (4) 青木 孝夫、「雨の美学への招待」、『第五

回東方美学会・第16回日韓美学研究会合同国際研究会報告書』、査読無、2010、pp1-10

- (5) 青木 孝夫、「<泣き>の文化的・芸術的表現についての比較文化—日本を軸に—」、『Asia and Korean Wave Culture & Culture Contents of Korea from Foreign Viewpoint』、査読無、2010、pp11-14
- (6) 青木 孝夫、「作為日本文化産業内容的四季美学」、『文化原型の大衆化、解釈的問題』、査読有、2010、pp57-58

[学会発表] (計 11 件)

- (1) 青木 孝夫、「朧の美学—夏目漱石と美術—」、広島芸術学会、2013年5月4日、広島県立美術館
- (2) AOKI Takao, The Aesthetics of Night Rain as a Topos of Self-Recovery, using the Penetrating Model of Natural Beauty, 東方美学研究会, 25 Aug 2012, 中国・瀋陽
- (3) 青木 孝夫、「夜雨の美学」、広島芸術学会、2012年7月21日、広島
- (4) AOKI Takao, Aesthetics of Meteorology and the Somaesthetics of Rain, Snow, Freezing, Coldness and so on. Constructive Postmodernism and Ecoaesthetics (招待発表), 13 Jun 2012, 中国・済南
- (5) AOKI Takao, On the Aesthetics of Obscurity with regard to Weather, The High-level Forum on Western Aesthetics in the Oriental Vision, 2 Aug 2011, China Hohhot
- (6) 青木 孝夫、「雨の美学を巡って」、文芸懇話会、2011年6月17日、広島まちづくり市民交流プラザ
- (7) AOKI Takao, The Aesthetics of Weather or Water as an Aesthetic Category, 日本・ポーランド国際美学研究集会, 24 May 2011, Poland Krakow (招待発表)
- (8) 青木 孝夫、「雨の美学への導入」、第16回日韓美学研究会・第5回東方美学会合同国際研究集会、2010年4月1日、広島大学
- (9) 青木 孝夫、「作為日本文化産業内容的四季美学」、‘文化原型の大衆化、解釈的問題’国際学術研討会、2010年10月22日、中国・山東大学
- (10) AOKI Takao, Aesthetics of Rain, 第18回国際美学会(招待発表), 13 Aug 2010, 中国・北京大学
- (11) 青木 孝夫、「<泣き>の文化的・芸術的表現についての比較文化—日本を軸に—」、BK21国際学術大会「韓流と人文コンテンツ」(招待発表)、2010年2月26日、韓国・成均館大学

[図書] (計 2 件)

- (1) Takao AOKI, (共著)『建設性後現代思想与生態美学』、山東大学出版社、2013 (単独執筆箇所:「阴的气象美学与身心实存的交流」『Aesthetics of Negative Weather: An Analysis of the Communication between the Mind-body Existence and the Macro Cosmos with a Focus on Rain in a Broader Sense』 pp137-159)
- (2) 青木 孝夫、(共著)『日常性の環境美学』勁草書房(西村清和編)、2012 (単独執筆箇所:第13章「雰囲氣的景色観と雨境——雨の美学への序章」、pp304-330)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

青木 孝夫 (AOKI TAKAO)

広島大学・大学院総合科学研究所・教授
研究者番号: 40192455

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号:

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号: